

死を較べる

渡 辺 忠¹

1. 序

死を較べることができるだろうか。たとえば、人生の終末期に人工呼吸器や生命維持装置に拘束されて病床で衰弱したまま迎える死よりも、元気で活動でき自分らしい生を送るなかである日苦しまずにぽっくりと死ぬ方がよい、と思わないだろうか。また、どれほど高齢まで元気に生きたとしても老人の死が痛ましく悲しいものでなくなるわけではないが、それに較べても、幼い子供や有為な青年が突然その生を絶たれる方がはるかに重大で痛ましい悲劇だと感じないだろうか。死を較べてどちらの方がより悪い¹という判断をわれわれは下している。

本稿は、このような判断の根拠とされる有力な哲学的主張について、批判的に吟味を加えるものである。以下、IIでは死の悪に関するエピクロスの説を見る。それによれば死が死ぬ者にとって悪いとするのは不合理な謬見である。IIIでは、これに対する標準的な剥奪説の枠組みを確認する。剥奪説はエピクロスの論難を回避して死が死ぬ者にとって悪でありうることを説明する。IVでは剥奪説の当初の困難に対応して加えられた修正を確認する。剥奪説は生比較説あるいは死トークン比較説という形をとるようになる。Vでは、ヘルスケアの分野での死の比較という観点を概観し、剥奪

¹ 白鷗大学教育学部 心理学専攻
e-mail : 72_wtnbtds_27@fc.hakuoh.ac.jp

説を用いてその根拠を与えようとする試みについて検討する。Ⅵでは、そのような試みはうまくいかず、死の悪の比較を説明できておらず、Ⅶでは、仮にできたとすると死の価値について直観に反する帰結が伴われることを示す。Ⅷでは、標準的な剥奪説とは異なる死の比較について触れる。

Ⅱ. 死についてのエピクロス主義

死の悪さの比較は、しかし、そう簡単なものではない。そもそも死が悪いかどうかについても、それを否定する見解がある。もちろん、死を恐れるのは自然な気持ちであり、その根底には死を自らにとって最も悪い出来事と捉える暗黙の理解がある。だが、哲学者の中には、これが迷妄でしかないことを論理的に示そうとする者がいた。エピクロスはその代表的な人物である。今日に残されたエピクロスの書き物の断片の中から、その有名な一節を以下に引用しよう。

死はわれわれにとって何ものでもない、と考えることになれるべきである。というのは、よいものと悪いものはすべて感覚に属するが、死は感覚の欠如だからである。…それゆえに、死は、もろもろの悪いもののうちで最も恐ろしいものとされているが、実はわれわれにとって何ものでもないのである。なぜかといえば、我々が存するかぎり、死は現に存在せず、死が現に存するときには、もはや我々は存しないからである。そこで、死は、生きているものにも、すでに死んだものにもかかわりがない。なぜなら、生きているもののところには、死は現に存しないのであり、他方、死んだものはもはや存しないからである。

(「メノイケウス宛の手紙」『エピクロス 教説と手紙』出隆・岩崎允胤訳、岩波書店)

エピクロスの言い分を以下のように論証として再構成すると²、死の悪という問題の要点がわかる。

- (1) 死は死ぬ者の無化 (annihilation) あるいは存在の終焉である。
 - (2) 出来事がある人物にとって悪でありうるのは、その人物がそれを悪として経験できる場合に限られる。
 - (3) 存在しない者はいかなる経験ももたない。
- ∴ (4) 死は死ぬ者にとっての悪ではない³。

(1) はFeldman (2000) で「終焉テーゼ (termination thesis)」とよばれているものだ。これについても議論はあるが、ここではいわば定義的な意味で理解しておくことにする。つまり、死とは死ぬ者が存在しなくなり無化することと理解する。(2) はMcMahan (1988) が「狭義の経験要請」とよぶものだ。エピクロスの価値論は快樂主義と考えられているが、快樂主義におけるよさと悪さは、経験される快樂と苦痛からなる。(3) は、(1) の「存在」が単なる物理的存在にとどまらないのであれば、自明の真理である。これら三つの前提から妥当な演繹的推論の帰結として結論(4) が得られる。前提の全てが真であれば、結論も真であることは不可避となる。だから、死が死ぬ者にとって悪でありうるためには、前提(2) を退けなければならない。

III. 死の悪についての剥奪説

死が悪でありうることを論じた記念碑的論文はNagel (1970) であり、これが今日に至る「死の形而上学」という分野を拓いた。それによれば、前提(2) のように「人に起こりうる善や悪を、特定の時点において彼に帰される非関係的な諸性質に限定することは、根拠のない独断に過ぎない」⁴。「全く関係的でしかない善と悪」が存在し、死の悪は「現実と可能だった非現実との対照に基づく悪」なのである。ひとが死ねばその人はもはや存在せず「非関係的な」悪はありえないが、その死がかりに起きなかった「可能だった非現実」においてよき生を享受しているのであれば、それとの対照において現実世界で死んだことは悪なのである。死によってその

可能的なよき生が「剥奪された」からである。

Nagelの発想は死の悪に対する標準的な説として多くの哲学者によって洗練され、概ね以下のような説と理解されている⁵。剥奪説は、死ななければどうであったかという「現実と可能だった非現実の対照」に訴えて反事実的状况を説明するために可能的世界の概念、とくに反事実的条件法の論理の意味論であるLewis-Stalnaker理論を用いる⁶。Sが死ななかった世界、つまり、Sが死んだ現実世界とは何らかの類似性の測度Rにおいて最も近い世界であって、しかも「Sが死ななかったならば」という反事実的条件文の前件が真となるような世界において、どのような帰結が生じるかを考える。そこでSが生きるに値する生を継続できていたなら、現実世界におけるSの死は、Sにとって悪いことだったのである。その世界では死後もはやSが存在せずよいも悪いもいかなる経験ももたないのはエピクロスの言うとおりで、それはSの死が悪いことと矛盾するわけではない。死の悪さは、Sが死んだ現実世界と、Sが継続して生存している反事実的な代替世界との違いにもとづくのである。つまり、現実の世界で実際に経験されるよさ／悪さという価値とは別の価値があるのだ。前者を内在的価値(intrinsic value)、後者を包括的価値(comprehensive value)⁷とよぼう。前者はNagelのいう「非関係的」価値であり、後者は「関係的」な価値である。死の悪さは後者の典型的な例であるから、剥奪説は、このような包括的な価値の定義から死の悪を導こうとする。このような反事実的条件法にもとづく死の悪の理解を以下では「標準的な剥奪説」とよぶことにする。

死が生じなかったR最近接世界、つまり「現実世界とは何らかの類似性の測度で最も近い世界」がどう特定されるかは重要な問題である⁸。頭髪の本数が一本違うだけで現実と異なる世界が想定できるから、可能世界は無数にありうる。死の評価にとって意味のある可能的な代替世界をどう選出するかは、哲学における概念的な議論を超えて、後述するヘルスケアの分野などで実践的な死の評価をするためには決定的に重要な問題である。そして、この問題にこそ、死の価値比較にとって困難な問題が伏在してい

と思われる。それについてはVI節に述べる。

以上のような概念装置が揃ったところで、包括的価値が以下のCVのように定義される⁹。

CV 類似性関係Rに相対的な、世界wにおける人物Sにとっての出来事Eの包括的価値

= Sにとってのwの内在的価値

－ Eの生じなかったR最近接世界のSにとっての内在的価値

包括的価値は内在的価値を用いて定義される。内在的価値は必ずしも快苦に限られるわけではないが、ここはFeldmanによる説明が明瞭なのでそれを用いよう¹⁰。Feldmanはエピクロス批判の戦略としてエピクロスの快樂主義を仮定する。その場合、Sにとっての世界wの内在的価値は、Sがwで生きた生に含まれる快樂の総量から苦痛の総量を差し引いたものとなる。その内在的価値の総量の二つの世界での差分が包括的価値である。これら価値量の実数値で表現されるというのが暗黙の仮定である¹¹。こうして、出来事Eのよさ／悪さが導かれる。すなわち、Eの包括的価値が正であれば、世界wにおいてEはSにとってよく、負であれば悪い。死も出来事Eの一例だから、死が生じなかった世界でのSの生き延びた生が正の内在的価値をもつならば、Sが死んだ世界での価値量からそれを差し引くと包括的価値は負となり、死はSにとって悪いのである¹²。包括的価値が負である場合「剥奪」量と見なすなら、剥奪量の絶対値の大きい死の方がより悪いことになる。死の悪さは、対照される二つの生のよさの差分によって定義される。標準的な剥奪説の発想は、生と死を直接に比較して死の価値を説明するのではなく、生と生の比較（life-to-life comparison）を用いて間接的に死の価値を説明するものなのである。ここから標準的剥奪説は生比較説（life comparison account）ともよばれる¹³。

このような説明が成功しているならば、剥奪説はエピクロスの論証を出

し抜いて、死が死ぬ者にとって悪いものでありうる理由を示し得たことになるだろう。Feldmanに従うなら、エピクロスは死が内在的に悪いものではありえないことを正しく指摘したのだが、包括的に悪いものであることを見逃していたのである¹⁴。

剥奪説は死の悪に関する哲学者たちの間で多数説の地位にあるものの、いくつかの大きな問題があり、死の形而上学の議論はこの諸問題をめぐって展開されている¹⁵。第一に、何かが誰かにとって悪いものであるためには、そのときその誰かが現に存在するのでなければならないように思われる。だが、死が非存在を含意するなら、死んでいることが当人にとって悪いものであることはありえない。これは主体問題、あるいは無主体の困難とよばれる。剥奪説はこれを、死者がもし生きていたならば彼に生じたであろう利益と損害の総量と、死んでいたら彼に生じた利益と損害の総量との比較にもとづけて説明している。だが、ここに第二の困難がある。無主体の困難から、死んでいる間に死者が実際に経験した善と悪の総量は存在しない。すると、比較の第二項が存在しないので、このような比較はいかなる場合にも不整合で実行不可能であることになる。このような比較は理解不可能な矛盾した物言いなのだ¹⁶。第三に、死の悪が帰属される時点の問題がある。死の悪さは、いつ死ぬ当の人物に帰属されるのか。彼が生きている間ではない。なぜなら、彼はまだ死んでおらず、死はまだ何ものも奪い去ってはいないからである。また、死後でもない。なぜなら、彼はもはや存在していないからである。先に引用したエピクロスの一節は明らかにこのことを言っている。第四に、ルクレティウスの対称性問題とよばれるものがある。死後の非存在と誕生前の非存在は鏡像のように似ている。誕生前の非存在を誰も悪と見なさないなら、対称的に、死後も同じく悪ではないとしなければならない。剥奪説はこれを回避できない。剥奪説が正しいなら、早死にすることは我々から多くの善きものを奪うがゆえに悪であった。だがそうだとすると、実際に生まれるより相当に早く生まれることができたなら、より早く人生を始めて多くの善きものを享受できたはず

であるから、遅く生まれることもまた我々から多くの善きものを奪い去るゆえに悪なのでなければならない。対称性は同じなのだ。だが、誕生前の非存在と死後の非存在を対称的に考える者はいないだろう¹⁷。

これらは興味深く重要な問題だが、本稿が扱うのは、それらと関連してはいるものの区別される問題、死はどの程度悪いのかという問題である。それは、本稿の冒頭で述べたような死と死の比較、複数の死の間でその相対的な悪さを較べるという問題である。そして、私見では標準的な剥奪説にとってこちらの方がより深刻な問題である。

IV. 死トークン比較説

Nagelの剥奪説の発想は上述のようにFeldman (1991), Broome (1993), Bradley (2009) では生と生の比較として再構成された。だが、そこには問題の焦点の移動がある。どのような死も死ぬ者にとっての悪であるというNagel (1970) 末尾の問題意識が、それ以降の剥奪説の議論では継承されなくなるからである¹⁸。この点はMcMahanの以下の二つの引用がより明確に表明している。死の悪の問題は「死そのもの」の悪ではなく「この特定の死」の悪をどう評定するかという問題へと移行するのだ。これは大きな変更である。

死ぬことで誰かの不運がどれほど大きいかを評価するとき、我々は彼の現実の生を彼が永遠に生きたであろう仮想の事象系列（出来事の成り行きcourse of events）と比較しているのではない。そうではなく、彼がその特定の死を死ななかったが結局は何か別の仕方死んだであろう事象系列と比較しているのだ。つまり、我々が想像しているのは、彼の現実の死のその特定の原因は生じなかった事象系列であって、死のいかなる原因も決して生じなかったであろう事象系列ではない。

(McMahan 2002, 103)

我々が関心をもつのは、あるタイプの出来事——死そのもの——が起きなければどんなことが起きるのかではなく、そのタイプのある特定のトークン——つまり、この特定の死——が生じなければ何が起きるかということの方なのだ。だから、我々の問いは「この死はどれほど悪いのか（あるいは悪かったのか）」というものであるべきだ。(ibid.)

エピクロスの説では死は悪ではないのだから、若死にしようと長生きして死のうと、そこに違いはない。生の質こそが重要なのであって長さは問題ではないだろう¹⁹。剥奪説は死が死ぬ者にとって悪でありうることを示した。だが、どちらの死も死ぬ本人にとって悪いとはいえ「24歳で世を去ったキーツの死は、一般に悲劇的なものとみなされているが、82歳で迎えたトルストイの死は、そう見なされていない」²⁰のであり、一般に早死にの方が長生きよりも悪いと考えられている。この直観が説明されなければならない。

剥奪説は死によってそのひとの未来の厚生が剥奪されることを死の悪の根拠とするのだから、剥奪のより大きい死はそれだけより悪いことになるだろう。剥奪説からは、より早い死の方がより悪い死である (the earlier, the worse) ことが帰結するとされる。したがって、他の条件が同じであれば、老人の死よりも中年の死の方が、中年の死よりも青年の死の方が、そして青年の死よりも小児の死の方がより悪い。最も悪い死は、人物がこの世界に存在するようになったそのときに死ぬことである²¹。これは死が剥奪する生の総厚生量の大小比較にもとづく。死と死の価値比較を、このような死による遺失厚生総量の比較とする考え方を改めて「生比較説」、あるいは「死トークン比較説(death-token comparison account)」とよぼう。死と死の比較において、標準的な剥奪説はこの生比較説の立場に立つ。

だが、生比較説は、一つの直観を満足させるが、別の直観に抗う。前途ある青年の死と、まだ物心つく前の小児の死を較べるとき、どちらも悲劇には違いないが、前者の方がより悲劇的だという直観は否定しがたい。ま

して、死産や自然流産による死は、不幸には違いないが、前途ある青年の死が本人にとっての悲劇であるのと同じ意味で胎児にとっての不幸であるとは考え難い。

また、生命倫理における重大問題である人工妊娠中絶の許容可能性に関して、この生比較説はきわめて保守的な主張をすることになる。全ての人工妊娠中絶が原則として道徳的に誤っていると論じたMarquis (1989) は「我々に似た未来」論法としてこれを用いている。プロチョイス派ならばセンシエンス基準なり人格基準なりで道徳的に許容可能とする初期中絶は、より大きな「我々に似た未来」を剥奪するゆえに道徳的により悪いからである²²。したがって、受精直後の死が最悪の死ということになる。だが、初期の自然流産や受精卵の非着床は、それ以降の流産や中絶、乳児期以降の死よりもいっそう悪いとするのは明らかに大多数の直観に反しているように思われる。一般に死は早く起きれば起きるほどより悪いが、あまりに早すぎる死はその限りではない。そう我々の多くは考えているようにみえる。

この問題に対処する仕方はいくつか考えられる。その第一は、我々の大多数の直観が実は誤っているのであり、死はじっさいに早く起きれば早く起きるほど悪く、我々が存在し始めるのが受精のときであるなら受精直後の死が最悪の死だと認めるものだ²³。あるいは、この悪さは価値論的な意味での悪さであって、初期胚の死を最大の悪と考えない我々の大多数の直観は、情緒的な意味においての悪さという別の価値概念に訴えているのかもしれない。受精直後の死は情緒的な意味では最悪ではないが価値論的には最悪の死である。有為な青年の死は情緒的には最も悲劇的な死だが価値論的には受精卵の死より悪くないのだ²⁴。だが、これは直観に反しているだけでなく、情緒的意味の悪さと価値論的な意味の悪さがなぜ区別され、またどう関係するのか明らかではなく、十分な説得力をもたない。

第二は、死がそれにとって悪くなりうるような価値主体が出現する時期を、人生のもう少し後に置くことだ。価値主体には一定の心理特性がな

ければならないが、細胞塊に過ぎない初期胚にはそれが存在しない。心理特性が感覚能力であれば中期の胎児、人格（いわゆるLocke的な人物性 personhood）であれば生後しばらくしてということになる²⁵。この場合、少なくとも初期の中絶は価値主体の死をもたらすことではないだろう。価値主体として完成するのがもっと遅い時期であれば、乳幼児と少年と青年の死を較べたとき、少年の死が最悪ということになるかもしれない²⁶。これは尤もではあるのだが、我々の形而上学的本性について、あらかじめ強い仮定を置くことになる。つまり、我々は本質的にヒトという動物ではなく、心理特性を本質とする人物（person）であって、初期胚や胎児、場合によっては乳児すら我々と数的に同一な存在者ではないのだ。これは意外にも多くの哲学者が賛同する立場ではあるが、哲学者以外の人々が賛同しうるものではないようにみえる²⁷。

第三の、そして賛同者の多い説が時点相対的利益説（time-relative interest account）である。提唱者であるMcMahanは、人生の各時点における死の悪さの比較を、時間を通しての我々の持続の問題と並行して考える。ごく初期の胎児や乳幼児の死はたしかに死ななければ享受していただろう多くの未来の厚生を剥奪するが、その剥奪される未来の人生の価値、あるいは遺失厚生量は、当の胎児や乳幼児に帰属できるだろうか。帰属できるのは、その未来の存在者と胎児や乳幼児が数的に同一であるときに限られる。だが、通時的な同一性関係は価値論的に重要ではないという考え方が²⁸。むしろ重要なのは心理的な統一性・連結性なのだ。

もし同一性が重要なことでないなら、重要であるような関係——自愛にもとづく統一関係——が死の時点における彼自身と、もし生きていたならば彼がそうであつたであろう彼自身との間により弱い程度に成り立ったことだろうから、死による未来の喪失が死の時点における死ぬ者の観点からみてそれほど重要ではないような場合が存在するかもしれない。そのような場合には、生き続けることに対する個人の利益

は、彼の全体としての生にとって死がより悪いものとなる度合いを反映して、彼の生き続けることに対する時間相対的利益よりも強いのである。生き続けることに対する個人の時間相対的利益の強さは、結局、現在の彼のためあるいは彼の現在の観点から、彼が生き続けることがどれほど重要かということの度合いなのである。それは、彼がかりに生き続けるとしたときに、今の彼自身と後の人生における彼自身との間に成り立つ自愛にもとづく統一関係がどれほど強いかを考慮に入れるのである。(McMahan (2002, 121))

時点相対的利益説による死の悪の説明は、標準的な剥奪説による剥奪厚生量に対して、心理的連結性による割引を施したものである。時間を通しての自愛にもとづく (prudential) 統一関係の度合いの中には「期間を通して維持される心的生の割合、その心的生の豊かさと濃密さ、そして以前と以後の様々な状態の間での内的な相互参照の度合い」が含まれる²⁹。このような統一性が不十分であれば、未来の自己たる存在者のもつであろう利益は、それだけ不十分にしかそのものに帰属することはない。その場合には、不十分な度合いに応じて割引かれるべきである。だが、将来の自己との間にすでに十全な心理的連結性が成立した後では、その時点以降の人生の総厚生量はそのまますべてその人物に帰属するものと考えられるので、割引は生じない。この場合には、時点相対的利益説と剥奪説の結論は同じものになる。たとえば、20歳の青年が死ぬことによって剥奪される人生の価値は剥奪説でも時点相対的利益説でも同じである。だが、胎児や乳幼児などにとって、それ以降の発達した自己との心理的連結性は希薄である。胎児が死亡することによって、20歳の青年が死ななければ享受していたであろう人生と同じ人生を、死ななければその胎児が生きることができていた場合であっても、それが剥奪される厚生量の総量は、心理的連結性の弱さに応じて割引かれなければならない。ある時点での存在者のそれ以降の時点における自己に対する心理的連結性を表す係数が、全く存在

しないことを表す 0 から完全な連結性があることを意味する 1 の間の数であれば、先の包括的価値量で表される剥奪される厚生量にその係数を乗じることによって、その時点での相対的利益が得られる。したがって、死によって剥奪される厚生の総量は、剥奪説の場合には受精直後が最大でそれ以降は年齢に反比例する単調減少関数であるのに対して、時点相対的利益説では、受精直後は殆どゼロであり、心理的連結性の完成する時点までは増加して、それ以降年齢とともに減少に転ずるような関数で表すことができるだろう。剥奪説では受精直後が「死ぬのに最悪のとき」だが、時点相対的利益説ではもっと後の若者になったときである。

時点相対的利益説には、多くの利点がある。一つは、先に述べた直観、つまりあまりに早すぎる場合には死の悪さはそれほど大きなものではないという直観をうまく説明してくれることだ。死が早く起きれば起きるほど悪くなるのは、心理的連結性による割引が施されなくなって以降のことである。これは、人工妊娠中絶の道徳的許容可能性に対して、リベラルな立場を正当化してくれる根拠となりうる。いわば胎児は「我々と同じ未来」をまだもたないのである。

また、時点相対的利益説は、我々の本性を心理的存在者としての Locke の人物として理解するものである必要はない。我々の形而上学的本性をヒトという動物と考える動物説 (animalism)³⁰ の立場に立ちつつ、人工妊娠中絶の道徳的許容可能性を認めることができる。受精直後の初期胚が我々と数的に同一の存在者であっても、未来の自身に対するその存在者のその時点における利益はきわめて低いと考えられるからである。

さらに、時点相対的利益説は生物種間の道徳的扱いの違いを種差別に訴えることなく説明できる。ふつう、種の間での認知的能力の差による心的経験の質的差異が、価値的に重要な差異を説明すると考えられることが多いが、他の種の動物はヒトにはない質の厚生、たとえば犬の場合の嗅覚的に豊饒な世界の実験などがあり、種の間での質的差異に訴えてヒトという種の道徳的重要性を擁護するのは公平ではない。逆に、ヒトに特有の負の厚生

の甚大さがヒトの扱いにとって不利に働きかねない。だが、時点相対的利益説にとって基本となるのは、厚生の一質の差異ではなく、死の時点の存在者と未来の時点の存在者との間の価値論的に重要な連関の程度である。このような連関の程度・強弱が、ヒトと生物種との間では生物学的な事実として異なっているように思われる。成獣であっても、ヒト成人と同様の未来への心理的統一性や連結性をもたないとしたら、その扱いはヒトと同じである必要はない³¹。

時点相対的利益説には強力な反論があり、標準的な剥奪説との間で批判の応酬がある。そして、そこで提起された問題は興味深いものであるとともに、死トークンを、それゆえ異なる生を比較するという問題にとっても重要な示唆を含むものである。だが、それを吟味することは本稿の主題にとって差し当たり不可欠ではないので、別稿に譲ることとする³²。問題にしたいのは、標準的な剥奪説であれ（部分的には）時点相対的利益説であれ共有している、死トークンの悪さが年齢にそった順序の尺度の上に位置付けられるという直観である。この直観はヘルスケアの分野での死の評価では中心的な役割を果たしている。

V. 死の比較：ヘルスケアにおける死の比較

死の比較という問題意識は、もちろん哲学に限られるわけではない。生死の選択がかかわる医療の場面では、医療政策や措置に由来する可能的な死の間で優先順位の比較をしなければならない場合がある。これは希少性にもとづく医療資源配分の正当化の問題である。たとえば、感染症症に対するプレパンデミック・ワクチンの接種対象者の優先順位をどのように決定するかという問題は、その選択によって救命される集団や個人の生命と機会費用として生じる別の集団や個人の死を比較することを伴わざるをえない。そして、「他の条件が等しければ、ある個人の死のその人にとっての悪さが、別の個人の死のその個人にとっての悪さよりもより大きいならば、後者ではなく前者を救命すべきより強力な理由がある」と考えるの

は自然なことだ³³。死の比較は、何らかの選択や決定のために行われる。死の比較は、生の選択のためのものなのである。そして、この生の選択は、個人内的な選択にとどまらず、個人間選択をも含むものである。死の悪の評価は、ヘルスケアの行為・政策決定にとっての基準として働くことが期待されているのである。ヘルスケアの文脈では、死の悪の評価、死の比較に、哲学的観点に加えてさらにもう一つの観点が付け加わったことになる。

死の比較において用いられてきた指標に、文字通り死によって失われる人生の年月を表す潜在的余命損失年数 (potential years of life lost: PYLL) がある³⁴。これは、死亡時年齢と基準値としての平均余命との差であり、早世によって剥奪される年数である。平均余命が70年であれば25歳での死は45年の潜在的余命の損失、65歳での死は5年の潜在的余命の損失となる。死亡原因ごとのPYLLを集計することで、たとえば1944年のPYLLは、心臓疾患で1,900万、癌で1,300万、結核で1,200万となり、医療政策・公衆衛生政策の重要なデータとなる。PYLLには算定の下限を出生時とするか1歳時とするか死産も算入するかなどいくつかの考え方があり、また上限についても先進国の理想的平均余命を採るか地域ごとの年齢別余命の統計数値を用いるかなどの議論がある³⁵。いずれにしても、このPYLLは死による剥奪年数の指標であり、ヘルスケアの観点からは十分ではなく、さらに疾病や負傷による厚生喪失をも考慮に入れることになる。死の剥奪と病気や障害による剥奪を統合した指標として開発されたのが障害調整生存年 (disability-adjusted life year: DALY) であり、疾病負荷研究において用いられている。疾病負荷 (disease burden: DB) とは、病気や怪我による罹患や死亡から生じる損害を測定したもので、世界疾病負荷研究 (the global burden of disease: GBD) では様々な国や地域での健康にかかわる様々な損害を共通の尺度で測定し、合計された数値をその国や地域の疾病負荷の集計値としている³⁶。この疾病負荷研究の指標尺度としてDALYsが用いられる。DALYsは損失生存年数 (years of life lost: YLL) と障害生存

年数 (years lived with disability: YLD) の和で表される。YLDは、傷害を抱えて生きる年数であり、特定の病気や怪我に関連した障害がもたらす負担を表すそれぞれの障害の重み (disability weights) という 0 から 1 の間の数値と、その状態で生きる年数との積で表される。たとえば、重度の認知症の障害の重みは0.438で、その状態で10年生存すればYLDは4.38となる。これは完全に健康な状態で生きた10年に対してその障害がもたらす「負荷」を表す³⁷。一方、YLLは死によって剥奪される年数のことであり、理想的な状況で人間が生きることのできる生存年数を基準値とし、それと実際の死亡時年齢との差をとったものである。GBD1990では当時の最長寿国である日本の出生時余命 (男性80歳、女性82.5歳) が用いられたが、GBD2010では男女ともに86歳と設定された。但し、一定の年齢まで生存すれば、そのときの平均余命は出生時余命より長くなるので、死亡時の平均余命との差と考えればよい。たとえば80歳時の平均寿命が91歳であれば、ある人物が80歳で死亡したときのYLLは11となる。この人物が晩年の10年間で重度の認知症で過ごしていたとすると、DALYsは $11 + 4.38 = 15.38$ となる。したがって、DALYsは、死による剥奪ばかりでなく、この人物がこの健康状態のこの年齢で死亡したときの、理想的な人生との差、死と障害とによる剥奪の程度を表す数値となる。死だけではなく生存中の障害による「剥奪」も算入するという点でDALYsの考え方は興味深いものである³⁸。だが、ここでは死の悪についてのみ考えることにしよう。

DALYsの適切な定義をめぐる議論がある。YLLは平均余命と死亡時年齢との差であるから、死は早く起きれば起きるほどYLLの数値は大きく、死の害はそれだけ大きいことになる。だが、青年期の死と乳幼児期の死をどのように評価すべきかには見解の相違がありうる。GBD研究の対象地域によっては、この二つの死の社会的意味が異なることも考えられる。人口増加の大きい低開発地域では乳幼児の死よりも青壮年期の死の方が重大であるかもしれず、人口減少の著しい先進地域では乳幼児の死の方が深刻であるかもしれない。これは、個人の死の社会にとっての価値の問題だが、

死は第一義的には死ぬ本人にとっての問題である。死による剥奪は死ぬ本人が失う未来であり、YLLもまたそのようなものである。地域的文脈に関わらず、どの年齢の死を最も重大と考えるかというのは、死の評価にとって基本的であり、医療資源の希少性の下で救命すべき対象の選択が不可欠であるような場合は、重大な実践的意味をもつ。たとえば、新型強毒性インフルエンザに対するプレパンデミック・ワクチンの優先接種順序をどのように決めるか、老人・壮年・子供の接種順序の決定にはこのような考察が働かねばならない³⁹。とくに、人生初期の死を最も重大と見なすか否かは、政策選択上も大きな問題である。ヘルスケア分野での死の評価に関する哲学的議論は、おもにこの問題をめぐって争われている。じっさい、1990年から1996年のGBDでは、年齢に関する割引が施されごく初期の死はそれ以降の死よりも評価値が低く見積もられたが、2010年から2015年のGBDではこのような割引は廃止されている⁴⁰。どちらを採るべきかをめぐり哲学的な論争があり、厳格な若年優先主義では単純損失説として標準的な剥奪説の議論が援用されるのに対し、年齢加重を根拠づけ若年優先主義に修正を加える立場では時点相対的利益説が根拠として主張される。死の悪についての哲学的議論は、ここで実践的な問題と結びつくことになったわけである⁴¹。

だが、年齢加重の是非をめぐる論争があるとはいえ、ヘルスケアにおける剥奪にもとづく死の悪の議論は、死の悪をめぐる哲学的議論と同様に、あるいは並行して、共通の直観にもとづいている。どちらにおいても、死トークンの悪さが年齢にそった順序の尺度の上に位置付けられると考えられているのである。ヘルスケア分野においては、これは自明のことであるようにみえる。GBDでのYLLのように、標準的な長寿を剥奪厚生量の計算の基準とすれば、どのような死トークンも基準との差によって順序付けられ、それは（ごく初期に関する論争を除けば）年齢の順序と同型になるからである。理想的な長寿との差の大きさが、その死トークンの悪さの度合いとなる。ここでは、細部を除き、哲学的な死の悪さの議論、とくに剥

奪説が、実践的な応用場面と幸福な遭遇をしているかのようである。これは剥奪説を採る哲学者にとっては、願ってもない援軍と感じられたとしても無理はない。だが、話はそう簡単ではないと思う。

VI. 死トークン比較説の問題

死トークン比較説における「死の比較」（あるいは「生の比較」）における「比較」という観点を精査すると、哲学における剥奪説や時点相対的利益説と、ヘルスケアにおける死の比較の観点との間には微妙な論点のずれがあるように思われる。ヘルスケアの分野で想定されているような複数の死トークンを比較する共通尺度の根拠を、標準的剥奪説・生比較説は、したがってその一種である時点相対的利益説もまた、与えていないと思われる⁴²。ヘルスケア分野における死の比較の哲学的議論の焦点は、先に述べたように、剥奪厚生量が単純に年齢に反比例するか否か、年齢に関して剥奪厚生量の割引を許すか否かという点について争われている。剥奪説・死トークン比較説そのものは概ね正しいものとの前提に立っているようである。また、この「比較」も、個人内的な比較だけでなく個人間比較も特に議論なく前提されているようにみえる。死の形而上学とヘルスケア分野の死の比較論は、ある種の誤解に伴う幸運な共同作業になっているかのようである。

標準的な剥奪説の説明から明らかなことだが、剥奪説の死の悪における「比較」は、ある現実の死が起きた生を、反事実的な代替的生と対比し、その総厚生量を比較するものだ。厚生量が少ない生の方が「より悪い生」であるから、その死は代替的生「より悪い」わけである。言い換えれば、遺失厚生量つまり剥奪厚生量の多い死ほどより悪い死なのである。但し、標準的な剥奪説においては、この比較級評価は、対比される反事実的生に相対的なものであり、反事実的生しだいと同じような死が異なる評価にもなりうる。たとえば、同じ20歳の若者二人が交通事故で即死したとしても、一方はそれがなければ健康で幸福な90年の生を全うできたのに、もう一

人は事故以前には知られていなかった致命的病気のため事故にあわなくても2週間後に死亡していたとする。前者の死は70年の健康で幸福な人生を剥奪したが、後者は2週間の生を剥奪したに過ぎない。前者の死は大いに悪いが、それに比べて後者の死はそれほどではないと言えるかもしれない。だが、このとき、前者と後者の死を直接に比較して、前者の死の方が後者の死「より悪い」と言っているわけではないことに注意すべきだ。たしかに、それぞれの遺失厚生量だけの比較にもとづく比較も可能だから、このような理解が全く間違っているというわけではない。とはいえ、このような一見して比較可能に見える遺失厚生量の尺度は実は意味をもたない。それぞれの悪さは、哲学における標準的剥奪説では、対比される代替的生に相対的であって共通の代替的生に対比されているわけではないからである。

標準的な剥奪説によれば死は早く起きるほどそれだけより悪いことになるが、それは「他の条件が同じであれば」剥奪厚生量は早い死の方がより大きいからである。だが、この場合の比較は何を比較しているのだろうか。10歳での死と20歳での死、さらに60歳での死を比較するとき、反事実的な生の比較はどのようになっているのか。比較の基礎となる包括的価値量の定義CVにもとづいて考えよう。以下 w_1 はSが10歳で死んだ(D_1)世界、 w_2 はSが20歳で死んだ(D_2)世界、 w_3 はSが60歳で死んだ(D_3)世界としよう。(Sは007ではないので、同じ世界で二度以上死ぬことはできない。)標準的剥奪説によれば D_1 , D_2 , D_3 の価値はそれぞれ以下になる。

類似性関係Rに相対的な、世界 w_1 における出来事 D_1 の人物Sにとっての包括的価値

= Sにとっての w_1 の内在的価値

－ D_1 の生じなかったR最近接世界のSにとっての内在的価値

類似性関係 R に相対的な、世界 w_2 における出来事 D_2 の人物 S にとっての包括的価値

= S にとっての w_2 の内在的価値

－ D_2 の生じなかった R 最近接世界の S にとっての内在的価値

類似性関係 R に相対的な、世界 w_3 における出来事 D_3 の人物 S にとっての包括的価値

= S にとっての w_3 の内在的価値

－ D_3 の生じなかった R 最近接世界の S にとっての内在的価値

これらの包括的価値量の比較に意味があり、それゆえ三つの死トークンの相対的な悪さの比較ができるとすれば、「他の条件が同じである」ことの意味が重要になってくる。それは、あきらかに、「 D_i ($i=1, 2, 3$) の生じなかった R 最近接世界」が何であるかにかかっている。何であるかの解釈は複数考えられる。第一の、おそらく自然な解釈は、 w_1 の最近接世界を w_2 、 w_2 の最近接世界を w_3 とするものだ。死トークンどうしの間の比較と、それぞれの死トークンの剥奪説的評価のための反事実世界（およびそこに生じる死トークン）との比較とを同一視するなら、このように考えても不思議ではない。第二は、それぞれに異なる世界であってよいとするものだ。第三は、共通の標準化された最近接世界を考えるものだ。

第一の解釈には無理がある。 S が20歳で死ぬ世界が、10歳で死ななかった世界の R 最近接世界であるとするべき根拠はない。20歳で死ななかったという事実以上の何かがあって w_1 に対する w_2 の R 最近接性が帰結するわけではないからだ。20歳で死ななかった R 最近接世界についても同様である⁴³。

第二の解釈は意味がない。 D_1 , D_2 , D_3 の価値を比較するのに、それぞれ異なる代替世界に相対的な代替世界との差を考えても何の意味もないからだ。 R 最近接世界が適宜変化してよいのであれば、その R 最近接世界の内在的価値量は様々であり、死は早ければ早いほど悪いとは言えなくなる。

それはちょうど、3人の子供の身長を比較するにあたって、その各々の父親たちのそれぞれに異なる身長と子供との身長差を算出して比較しても意味がないのと同じである。これは不当なアナロジーだと思われるかもしれない。身長の場合では、三人の子供とその父親の身長差は様々で、その身長差の大小が子供の身長の順序と合致しないことは、そもそもそれとは独立に予め子供の身長の順序が決まっていることによるからだ。だが、上の死トークンのケースでは、あらかじめ三つの死トークンの順序が決まっているのではなく、むしろ代替世界との厚生量の差によって定義されるべきもののはずである。では、身長のアナロジーを少し変更しよう。三人の子供がいて、そのそれぞれの父親との身長差が「鬼っ子」関係を定義するものとしよう。父親との身長差が大きい子供ほどそれが小さい子供に較べて「より鬼っ子」である。この「鬼っ子」関係は、子供の身長はおろか年齢とも直接の関連はないだろう。それはさしあたり、それぞれの父親との身長差を表す以外の何の尺度でもない。標準的剥奪説による死トークンの剥奪厚生量である遺失包括的価値量の大小は、これと同じで、それぞれの死トークンがじっさいに生じたとき剥奪される人生のよさの、それぞれの死トークンに特有の大ききの尺度でしかない。それ自体は意味がないわけではないが、これと死が生じる年齢とを関連させるべき根拠はなく、異なる年齢での複数の死トークンの間の価値をそれに訴えて比較することは意味をなさない⁴⁴。

第三の解釈はどうか。これはまだ見込みがありそうに見える。共通の代替世界との内在的価値量の差を比較するというのは、価値比較のためには筋のよい発想である。問題は w_1, w_2, w_3 に共通の、標準的な剥奪説の意味での「R最近接な代替世界」がありうるかだ。もちろん「ない」とする論理的理由はない。だが、そのような世界が一意に存在すると仮定するのは相当に無理なことだと思われる。10歳で死ななかった世界と60歳で死ななかった世界がSの死に対する「R最近接」の共通の一意的代替世界でありうるというのはいかなる意味においてか理解困難である。10歳での

死、20歳での死、60歳での死というそれぞれ甚だしく異なる死が生じた甚だしく異なる世界に対して、それら異なる世界との比較の基準として取ることのできる、しかもそれぞれの世界と類似性の測度で最も近い、最小限にのみ異なっている、共通のR最近接な代替世界がある、とするのは、論理的には可能であっても、形而上学的に途方もないアクロバットが必要であるように思われる。

そうだとすると、標準的剥奪説・生比較説の定義に登場する比較は、そのまま死トークン間の価値比較、「死のより悪さ」の問題へと直接に援用できるわけではないと、少なくともそう結論付けてよいと思われる。時点相対的利益説もまた、基本的な反事実的発想を剥奪説と共有している以上、上の批判が当てはまる。もちろん、推移的順序であるような死トークン間の比較関係を定義する見込みがないわけではないが、少なくとも標準的剥奪説・生比較説の定義を改変しない限り相当に困難であることは明らかだと思われる。これが正しいなら、標準的剥奪説による「死の悪さ」の理解は、複数の死トークンを比較して死の年齢で順序付ける「死のより悪さ」の定義を与えることに成功していないのである。標準的な剥奪説は、60歳での死より20歳での死の方が、20歳での死より10歳での死の方が、それぞれ剥奪量がより大きいがゆえに、より悪い死であるという、当初説明できると思われた直観を説明し損ねている。死のトークン比較を反事実的考慮にもとづけて理解しようとする標準的剥奪説のやり方は、それにもとづく肝心の死トークン比較の推移的順序が、死トークンの起きる年齢の順序と順序同型にならないという厄介な問題を抱えることになると考えざるを得ない。

それぞれの死トークンが属する世界に対して共通に一意に確定する基準が固定できれば、これは解決できるように思われる。その場合、この共通の基準は標準的剥奪説の記述にあるような現実世界から類似性・相対的可能性関係で結合された代替世界ではありえない。それは死の生起する現実の世界から構想された反事実的世界などではなく、単に一般にもっとも長

寿とされているような生が全うされている世界である。死の悪の比較を死の起きる年齢の順序と同型な推移的順序として実現する一つの、しかもかなり現実的なやり方は、統計的な数値としての平均寿命のようなものを比較の共通尺度として取ることだろう。じっさい、このような理解はDALYsなどの指標を見ればうなずけることであり、それゆえにこそヘルスケア分野の死の比較の哲学的基礎を与えるという問題意識が存在しているわけである。

だが、このような「死の比較」は剥奪説の根幹部分、反事実的条件法にもとづく死の悪の理解の眼目を放棄することである。このような死の悪の理解が表しているのは、平均的な生に較べて、ある年齢で終わる生がどれだけよいかまたは悪いかということに過ぎない。エピクロスが誤謬として解消しようと試みた死の悪の問題が、「一般的に言えば長寿の生の方が短命である生よりもよい」という平凡な事実の確認へと帰着する結果となる。これはSilversteinが指摘するようにエピクロス主義者も受け入れるのに何ら痛痒を感じない「死の悪さ」である⁴⁵。

さらには、個々の死トークンをそれぞれの事情にもとづいて個別に比較するという、当初の死トークン比較説の目的からも逸脱せざるを得ない。生比較の対象となる標準的な反事実的生を、たとえば、その人口集団の平均寿命まで生き切ることのできる生として一意に確定することができたとしよう。先述したようにDALYsのような指標はこれを用いて定義することができるとされる。だが、この方針は死の因果的過剰決定ケースなどでは、死の個別事情にもとづく直観的な説明を与えることができない。たとえば、先述の、若い歩行者が交通事故で死んだが、検視の結果、事故死を免れてもわずかに二週間後に病気で死亡していたかもしれないというケースでも、その青年の死は、類似性の測度において最も近い可能世界である二週間後の突然の病死トークンとではなく、90年の寿命を生き抜いた大往生トークンと対比されることになる。これは、確かに、青年の事故死に対して我々の多くが感じる悲劇性と整合的な説明ではある。だが、反事実的条

件法にもとづく剥奪説は、この事故死がそれほど悲劇的ではないとみなす観点を説明することができるものだった。平均寿命との対比ではこれは説明することができない。このような死の因果的過剰決定が含まれるケースでは、より早く起きる死の方がよりよいと言える場合があると思われる。たとえば、地震で崩壊した建物の下敷きになり火の手が迫っていて生きながら焼死する直前に、落下したコンクリート塊で頭部を砕かれて恐怖や痛みを感じずの間もなく即死する犠牲者のケース⁴⁶では、すぐ後のより悲惨な死をその死が回避させたという意味で、この死トークンはまだしもましな死に方であったと言えるだろう。この直観は、標準的な長寿を反事実的生として取ることでは説明不可能となる。苦痛に満ちた終末を回避して自然で穏やかな死を得ようとする安楽死もまた、よりよい死ではありえないことになる。

「死の悪を比較する」という観点からは、さらに重大な問題が存在する。死の悪を評価するための共通の基準的な代替的生として理想的な平均寿命のような長寿を採るのは自然な考えだが、一意的な代替的生は必ずしも長寿である必要はない。先に挙げた包括的価値量の定義CVは評価対象である死トークンと代替的生の死トークンとの総厚生量の差分であるから、差分どうしの順序は、標準的な代替的生をたとえば10歳での死と設定したとしても90歳の死とした場合と変わらない。たとえば、30歳での死と40歳での死を基準となる90歳との差で比較するとき、ここで単純化のために生の総厚生量を年齢数と同じと仮定すると、30歳での死の包括的価値すなわち総厚生量の差分は-60、40歳での死のそれは-50となり、絶対値である剥奪量は30歳での死の方が大きくより悪い死である。基準が10歳であるときには、30歳での死の包括的価値は20、40歳での死のそれは30となり、包括的価値は後者の方が大きいので剥奪量はやはり30歳での死の方が大きくより悪い死であることになる。このように、比較される死トークンよりも基準的生がより若い場合、当の死トークンの包括的価値は当然正数となる。これを「死の悪の比較」とよぶのには違和感がある。出

来事が死の場合、負の包括的価値は死が起きたことによる剥奪量なのだから、正数は剥奪ではなく言わば「付与量」であり、絶対値の大きい正数は付与量の大きさを表している。基準的生が若い場合、これは基準的生の年齢で死なずに生き延びたよさの表現なのである。この比較は死の悪の比較とは言えない。むしろ、どちらの生がよりよいかの比較なのだ⁴⁷。標準的な剥奪説で一意的な基準となる代替的生を仮定するのは、死の悪の比較を放棄することに等しいと思われる。

VII. 最良の死の問題

それだけではない。かりに生比較の対象となる標準的な反事実的生を一意に確定して死トークンの間に推移的順序が定義でき、なおかつ上述のような問題が回避できたとしよう。その場合でも、剥奪説にもとづく死の比較には、さらなる同意しがたい帰結が伴うように思われる。それはむしろ「死のよさ」に関わる事柄である。最悪の死トークンについて見解の相違があることは、剥奪説と時点相対的利益説を対比したところですでに述べた。では、最良の死トークンについてはどうだろうか。複数の死トークンの間に比較順序がうまく定義できるとしたら、死トークンの数が有限であると仮定するのは自然だと思われるので、推移的順序において最悪のあるいは最良の死トークンがあることになるだろう。標準的な剥奪説と時点相対的利益説は最悪の死トークンについては見解が鋭く対立するが、最良の死トークンについては同じ結果になると思われる。それは、死トークン比較、すなわち生比較の基準的对象となる反事実的生に対比したとき剥奪量あるいは時点相対的利益の遺失量がゼロとなるような生である。つまり天寿を全うしての死が最良なのだ。これはごく尤もなことと思われるかもしれない。だが、それ以上生きることでも奪われることのなくなった生の終末とはどのようなものだろうか⁴⁸。

時点相対的利益説が有力な考え方として多くの論者に受け入れられているのは、標準的な剥奪説では存在し始めた瞬間の死こそが最悪の死とさ

れ、それが直観に反するように思われるからである。標準的な剥奪説が尤もだと思われるような生の始まりとは、生死の主体が存在し始めるやいなや完全な心的能力・心的統一性を備えた存在者として出現するような始まり方だろう。McMahanがアテナ的な誕生とよぶものであり、アテナがゼウスの頭部から完全な姿で誕生したという神話に由来する⁴⁹。時点相対的利益説は、このような暗黙の前提への現実的な反論を、剥奪説の枠組みの中へと取り込む試みと解することもできる。それは、主体の形而上学的本性と、それがいつ出現するのかという問題と不可分な議論でもある。

標準的な剥奪説が最良の死とする終末は、アテナ的誕生の鏡像のように、完全な心的能力・心的統一性を備えたまま、生の全てを生き尽くして突然消滅するかのような死であると思われる。このような死に方であれば、おそらく最良の死といえるだろう。だが、現実の生においては、生の開始がアテナ的ではないのと同様、天寿を全うしてこのように死ぬことは至難の業である。剥奪説では、徐々に衰えていき、もはや生の質がこれ以上ないほど低下して炎が消えるような死は想定されていないようにみえる。あるいは、死に至るまでの生の質の推移がどのようなものであるかは念頭がないというべきかもしれない。死による剥奪厚生量が尽きて死を迎えたときの死ぬ主体がどのような状態にあるかは問題ではないのだ。生存期間の各々の時点を通して享受される生の質は様々に変化する。時点相対的な厚生量をプロットしたグラフは、誕生からしばらくは急勾配の増加関数となり人生の最盛期において高止まりして老境を迎えるとともに徐々に減少し死において無に帰する曲線となるだろう。もちろん、ひとによって、人生の果実が早い時期に、あるいは遅くなってから実るような違いはある。これを「生の形」とよぶならば、死のよさ悪さには生の形がかかわりをもつという直観を否定できない。剥奪説は死が剥奪しうる人生の総厚生量だけを考慮し、生の形は一切顧慮しない⁵⁰。だから、尻尾が切断されたような死に方であろうと、低い生の質がさらに徐々に低下し衰弱死するのであらうと違いはないのかもしれない。だが、どちらであれ最良の死に違いはない

とするのは、「最良の死」ということばの少なくとも誤用ではある。生の形を考慮しないならば、よき死も悪しき死もただ単に死による剥奪厚生総量の多寡の問題にすぎなくなる。どのような死であれ、その死による総遺失厚生量が最小であれば最良の死であり、最大であれば最悪の死である。このような最良の死も最悪の死も、現にこの生を生きている者にとっては無縁というべきである⁵¹。

さらにもう一点付け加えよう。最良の死トークンが存在することは、死トークン比較説としての剥奪説がエピクロス説に部分的に譲歩しなければならないことを意味する。なぜなら、その死トークンの「悪さ」は、比較の対象となるよりよい反事実的な代替的死トークンが存在しないからには、剥奪説では説明できないからである。それゆえ、それは死トークン比較説では悪い死トークンではありえないはずである。その場合、その死トークンは、エピクロス説と同様に「悪くない」か、または「悪いが、その悪さは剥奪説で説明されない」かのいずれかということになる⁵²。

VIII. 死の比較と生の比較

標準的な剥奪説は、反事実的考慮にもとづいてCVのような差分を用いた原理から死トークンの価値を導き出す考え方である。死の比較はこの算出された価値を比較することである。だが、死トークンの価値比較が生と生の比較にもとづくのであれば、差分を比較するような回り道をせずに、もっと単純率直な比較に訴えることができるはずであり、じっさいCVもまたそれを前提している。死トークン比較は生と生の比較にもとづく⁵³。対象となる死トークンの悪さを代替となる反事実的死トークンと比較するところで、そもそもその二つの生の総厚生量を比較している。どちらの生もそれぞれの死トークンで終わるのだから、この比較はそれ自体死トークンの比較と見なしうる。死を較べるならこれで間に合うはずではないのか。

Broome(1993)は、「よい」「悪い」という原級的な価値判断は「よりよい」

「より悪い」という比較級判断に還元可能であり、死の悪さについても話は同じだという。

82歳で死ぬ方が、81歳やそれより若くして死ぬのに較べてよりよく、83歳やそれより老いて死ぬのに比べてより悪い。これがよりよさに関する話について言われるべきことの全てである。それ以上のこと、つまり、「82歳で死ぬことは嫌悪すべきことか」というのは殆ど中身の無い問いだ。(Broome 1993, 171)

原級的な価値判断は全く無意味というわけではなく、「ある出来事が悪いかどうか問題にすると、我々はふつう、それが比較の自明な基準に較べてより悪いとか否か問うていて、その基準は、そうでなければどんなことが起こっていたかというもの」だ。だが、82歳で死ぬことは嫌悪すべきかと問うとき、そうでなければ何が起こっていたかは曖昧なので、比較の規準として何をとるべきかという問いが生じる。標準的剥奪説の理論的な努力はここに傾注された。また、DALYsのように「比較の規準」として理想的長寿を採る考え方もある。だが、

比較の規準に関するこの問いに答えようとする事…は生の価値や死の悪さについて何も意味のあることを我々に教えてくれはしない。…82歳で死ぬことが何よりもよく何よりも悪いといったん述べられたなら、全ての重要な事実は完全に述べられているのだ。82歳で死ぬことが絶対的に悪いことか否かという、それ以上の意味のある問いは存在しないのだ。(ibid.)

生と生の厚生比較順序が与えられれば、生と死の比較について知られるべきものは全て知られたことになる。ある生は別の生より短く、それゆえ前者の死トークンは後者のそれより悪いということになる。概して、他の

条件が等しければ、短命よりも長寿のほうがよい。これがこの生比較による死の比較の言い分である。Broomeによれば死の悪に関してこれ以上の事柄は存在しない。

これは剥奪説と言え言えないこともない。だが、標準的な剥奪説のとらえていた直観は放棄されているように思われる。これはそもそも死の悪についての議論になっているのか。それは、ただ単に、短命の生の方が長寿の生よりも包括的厚生量は少ない、ということの修辭的言い換えに過ぎないのではないか。ここでは原級的な死の悪、Broomeの言い方では「絶対的な悪」は、価値判断の原始述語を間違えたために生じた疑似問題に由来するものとして、いわば蒸発してしまっている。「死の悪」のようなものが不合理な謬件に過ぎないというのであれば、もちろんそれはそれでよい。だが、死の比較は生の比較に過ぎず、固有の死の悪の問題は存在しないというのであれば、これは形を変えたエピクロス主義である。

IX. 結語

これまでの議論を整理しよう。反事實的考慮にもとづく標準的剥奪説が複数の死の悪さを比較するのであれば、代替的生との包括的厚生量の差分の比較によって死の悪を比較しなければならない。だが、CVなどの差分主義は、一般に、死トークン間の比較において死トークンが生じる年齢順序と順序同型な推移的順序を生み出さない。「より早い死がより悪い死 (the earlier, the worse)」とは言えないのだ。差分にもとづく定義によって二つの死トークンの価値を比較し、しかも死の起きる年齢の順序との同型性を保証するには共通の代替を想定しなければならない。しかし、この共通の代替はただ共通であればよく、DALYsにおけるような理想的長寿である必要はない。ごく短命な生を基準としても、死トークン比較の順序は不変である。すると、これは死の悪の比較になっているのかという疑問が生じる。それは、基準が短命な生の場合、「負の剥奪量」あるいは生の「付与量」の比較となる。これを死の悪の比較と見なすのは相当に無理がある。

共通の代替を想定しないとき、各々の死トークンに応じて反事実的代替が想定され、それとの差分で死の悪が算出され、それは確かにその死トークンの悪さを表しているといえそうである。つまり、ある死トークンの悪はその反事実的代替にあくまで相対的なのだ。だが、今度は、このような文脈依存的な死トークンの悪さを他の死トークンの悪さと比較し順序付けることには意味がない。定量的な数的表現がかりに可能であったとしても、それが有意味な定性的関係の表現であるとは限らないからである。

剥奪説は死の悪の正統的な哲学説、少なくとも主流説と考えられている。だが、これまでの考察が正しければ、かりに剥奪説が死の悪さを正当に説明しているとしても、複数の死の間の価値比較はそれにもとづくものではないといえそうである。言い換えれば、死が死ぬ者にとって悪いか否かということと、ある死がそれとは異なる死と比べてよりよいかより悪いかということは、別の事柄なのである。だから、ある死について、それが死んだ者にとって悪いと言いつつ、別の死に方よりはよかったということが正当に可能となる。そして、これは我々の死についての直観とかけ離れてはいない。本稿では、反事実的条件法にもとづく死の悪さの説明である剥奪説が、複数の死の間の価値比較を説明できるかを問題にしてきたが、死が死ぬ者にとっての悪であるかどうかについて、剥奪説そのものの是非を問題にしてきたわけではない。先に述べたように、剥奪説には多くの問題が纏わりついているが、それを論じるのは本稿の課題ではない。だから、かりに剥奪説が誤っておりエピクロス説が正しいとしても、本稿の結論には影響しないだろう。むしろ、死は死ぬ者にとって悪ではないのだが、ある死は別の死に較べてより悪いということが矛盾なく主張できるのかもしれない。あるいは、死トークン比較、生比較という観点が、エピクロスの問題意識とはすれ違っているのかもしれない。また、死によって剥奪される総厚生量の比較ではなく、生の中の各時点で享受される厚生量や「生の形」こそが、これらの問題にとって重要なかもしれない。だが、これらについては稿を改めてやり直さなければならない。死の悪をどう概

念化するのか、それが問われている。生と死についてそもそもどのような枠組みでどのように主題化するかは容易なことではなく、「死の形而上学」の定説を追うだけでは見えてこないのである⁵⁴。

文献一覧

- 江口聡 編 (2011)『妊娠中絶の生命倫理』勁草書房
- エピクロス『エピクロス 教説と手紙』出隆・岩崎允胤訳、岩波書店
- 広瀬巖, グレグ・ボグナー (2017),『誰の健康が優先されるのか』岩波書店
- Binmore, K. (2016), "Life and Death", *Economics and Philosophy*, vol. 32, no. 1, pp. 75-97.
- Bradley, B. (2008), "The Worst Time to Die", *Ethics*, vol.118, no.2
- (2009), *Well-Being and Death*, Clarendon Press.
- Broome, J. (1993), "Goodness Is Reducible to Betterness: the Evil of Death Is the Value of Life", in Broome, J. *Ethics out of Economics*, Cambridge University Press, pp.162-173.
- (2004), *Weighing Lives*, Oxford University Press.
- (2017), "The Badness of Dying Early", Solberg, C. & Gamlund, E. eds., *Saving Lives from the Badness of Death*, Oxford University Press.
- Brueckner, A. & Fischer, J. M. (1986), "Why Is Death Bad?", *Philosophical Studies* vol.50, no.2, pp.213-221.
- DeGrazia, D. (2005), *Human Identity and Bioethics*, Cambridge University Press.
- (2007), "The Harm of Death, Time-Relative Interests, and Abortion", *Philosophical Forum* vol. 38, no. 1, pp. 57-80.
- Dempsey, M. (1947), "Decline in Tuberculosis: The Death Rate Fails to Tell the Entire Story." *American Review of Tuberculosis* 56 (2) : 157-164.
- Feldman, F. (1991), "Some Puzzles about the Evil of Death", *The Philosophical Review* vol.100, pp.201-27.
- (1992), *Confrontations with the Reaper: A Philosophical Study of the Nature and Value of Death*, Oxford University Press.
- (2000), "The Termination Thesis", *Midwest Studies in Philosophy* vol.24, pp.98-115.
- (2006), *Pleasure and the Good Life*, Oxford University Press.
- Fischer, J. M. ed. (1993), *The Metaphysics of Death*, Stanford University Press.
- Gamlund, E. (2016), "What is so Important about Completing Lives? A Critique of the Modified Youngest First Principle of Scarce Resource Allocation", *Theoretical Medicine and Bioethics* vol.37, no.2, pp.113-28.
- Greaves, H. (forthcoming), "Against "the Badness of Death"", Solberg, C. & Gamlund, E. eds., *Saving Lives from the Badness of Death*, Oxford University Press.
- Hanser, M. (2008) "The Metaphysics of Harm," *Philosophy and Phenomenological Research* vol.77, pp.421-450.
- Lewis, D. (1973), *Counterfactuals*, Basil Blackwell. 邦訳 吉満昭宏訳『反事実的条件法』勁草書房。

- Liao, M. (2007), "Time-Relative Interests and Abortion", *Journal of Moral Philosophy* vol.4, no.2, pp.242-256.
- Marquis, D. (1989), "Why Abortion Is Immoral", *The Journal of Philosophy* vol.86, no.4, pp.183-202.
- McMahan, J. (1988), "Death and the Value of Life", *Ethics* vol.99, pp.32-61.
- (2002), *The Ethics of Killing : Problems at the Margins of Life*, Oxford University Press.
- Nagel, T. (1970), "Death", in Nagel, T, *Mortal Questions*, Cambridge University Press. pp.1-10. 邦訳 永井均訳『コウモリであるとはどのようなことか』勁草書房
- (1987), *What Does It All Mean? : A Very Short Introduction to Philosophy*, Oxford University Press. 邦訳 岡本裕一郎、若松良樹訳『哲学ってどんなこと?』昭和堂
- Olson, E. (2007), *What Are We?: A Study in Personal Ontology*, Oxford University Press.
- (2013), "The Epicurean View of Death", *The Journal of Ethics*, vol. 17, nos.1-2, pp.65-78.
- Parfit, D. (1984), *Reasons and Persons*, Oxford University Press.
- Priest, G. (2008), *An Introduction to Non-Classical Logic: From If to Is*, Cambridge University Press.
- Silverstein, H. (1980), "The Evil of Death", *The Journal of Philosophy* vol.77, pp.401-24.
- Solberg, C. (2018), *Evaluating Deaths: Reconciling the Badness of Death Debate and Summary Measure of Population Health*, Dissertation at the University of Bergen, (<https://www.researchgate.net/publication/322631207>)
- Solberg, C. & Gamlund, E. (2016), "The Badness of Death and Priorities in Health", *BMC Medical Ethics* 17:21.
- eds. (forthcoming), *Saving Lives from the Badness of Death*, Oxford University Press.
- Stalnaker, R. (1968), "A Theory of Conditionals," *Studies in Logical Theory, American Philosophical Quarterly*, Monograph: 2, pp.98-112.
- Thomson, J.-J. (2011), "More on the Metaphysics of Harm", *Philosophy and Phenomenological Research* vol.82, no.2, pp.436-458.
- Tooley, M. (1972), "Abortion and Infanticide", *Philosophy & Public Affairs* vol. 2, No.1, pp.37-65.
- Warren, M.A. (1999), *Moral Status: Obligations to Persons and Other Living Things*, Oxford University Press.

註

- ¹ 本稿で「死の悪さ」というとき、それは死ぬ本人にとっての悪さという意味である。死の悪に関する以下の哲学的議論は、この意味での悪さをめぐって行われてきた。もちろん、死は死ぬ者以外の者にとって大いに悪いものであるのが普通だが、それについては論じない。また、安楽死を考慮する場合など、死がよいものである場合もあるかもしれない。本稿が扱うのはそのようなよさや悪さを含めた本人にとっての死の価値の、とくに比較の問題である。
- ² これは歴史上のエピクロスについての解釈を主張しているわけではないことに注意されたい。

³ これはMcMahan (1988) でエピクロス論証と「よく似た論証」とよばれていたものである。引用後段は以下のように再構成できる。McMahanは本来的なエピクロスの論証をこちらだと考えている。

(1*) 死は死ぬ者の無化 (annihilation) あるいは存在の終焉である。

(2*) 人物がある悪の主体でありうるのは、それが起こるときその人物が存在する場合に限られる。

∴ (3*) 死は死ぬ者にとっての悪ではない。

「よく似た論証」の前提 (2*) が (2) の根拠を与えられる。但し、歴史上のエピクロスの解釈としての適切性は本稿の問題意識の外にある。また、前提 (2) と (2*) の違いに関わる、経験されないが本人にとって悪でありうる事柄についての興味深い問題も本稿では主題としては扱わない。但し、以下の剥奪説はそのような悪の存在を認めていると思われる。

⁴ Nagel (1970)、邦訳p.10。

⁵ 以下は、おもにFeldman, McMahan, Broome, Bradley等による議論を整理したものである。

⁶ 条件法論理のモデルについてはLewis (1973)、Priest (2008) を参照。

⁷ Feldman(1991)では「外在的価値(extrinsic v.)」、Bradley(2009)では「包括的価値(overall v.)」とよばれているが、要するに反事実的世界における内在的価値あるいは厚生との差分のことであり、概念的には効用理論で期待遺失利益 (regret) とよばれているものに近い。

⁸ McMahan (1988) は「反事実的条件法の前件を特定する問題」とよぶ。McMahanの解答は、死に至る因果系列の全体を除きそれ以外は現実世界と相似的である世界を構想するというものである。

⁹ これは基本的にBradley(2009) の「差異生成原理(difference-making principle: DMP)」である。Feldman (1991), (1992, Chs.8-9) における定義もほぼ同じである。

¹⁰ Feldman *ibid.*

¹¹ 定性的な比較順序関係が定量的な尺度で表現される条件は効用理論などでは理論の核となる重要な問題だが、哲学者たちにはあまりその問題意識はないようである。これは哲学的な価値論に制約を課していると思われるが、ここではそれを扱うことはできない。

¹² これが正であるなら、つまり、死なずに生き延びた世界でSが快楽より多くの苦痛を得て内在的価値が負になるなら、その死はよい。これは死が悪でありうることを認めながらも、安楽死を正当化する根拠になりうる。Feldman (1992) を参照。

¹³ McMahan (2002)。「生と生の比較」という表現はFeldman (1991) で自覚的に用いられているが、もともとはSilverstein (1980) においてこのようなアプローチに批判的な文脈で用いられたものである。

¹⁴ Feldman(1992)。このようなエピクロス批判が可能かどうかについてSilverstein(1980), Olson (2013) を参照。

¹⁵ 以下の整理はFeldman (1991) によるが、その基本形はすでにNagel (1970) で論じられている。

¹⁶ 先に述べた生比較説は、これに対する一つの回答である。比較されるのは評価の対象である死に終わる生と、その死が生じなかった可能的生であって、主体が存在する生

と存在しない死の不当な比較をしているわけではない、とされる。生と死の比較から生と生の比較（これは後述の死と死の比較でもある）へと転換することは、死の悪の問題を問う観点からは後述のように焦点の移行があると考えられる。

¹⁷ これについては、持続的存在者としての価値主体の起源の本質性にもとづく反論（Nagel (1970) 他）、価値に関する我々の態度の時間的非対称性にもとづく議論（Bruckner/Fischer (1986) 他）があるが、これについても本稿の埒外にある。

¹⁸ Nagel (1970)。そこで対比される反事実的な代替的生は不死の生ということになり、どのような死も無限大の悪さをもつように思われる。これは「死の悪」の一つの徹底した解釈だが、死と死を比較考量するということは不可能になる。

¹⁹ この点に関してはBinmore (2016) を参照。

²⁰ Nagel (1970)、邦訳14頁。

²¹ Bradley (2008), (2009)

²² Marquis (1989)、邦訳 江口編 (2011) 195頁。

²³ Bradley (2008), Greaves (forthcoming)。

²⁴ Greaves *ibid.*

²⁵ これはいわゆる「パーソン論」の立場である。Tooley (1972) (江口編 (2011) 所収)、Warren (1999) など。また、Broome (2017) は、心理的人物概念そのものではなく、存在者の漸次的完成という考え方を採ってこれを論じている。我々もまた建造物と同じように一気に完成して出現するわけではない。胎児のもつ利益は完成に至るまでのある種の「負債」によって相殺され、その剥奪が算入されるに至らないのである。

²⁶ このような観点からは嬰兒殺 (infanticide) が道徳的に許容可能になる。パーソン論からこれを肯定的論じたものとしてTooley (1972)。また、Liao (2007) はこれをもって後述の時点相対的利益説を退ける帰謬法的な論拠としている。

²⁷ 我々の形而上学的本性に関する議論は Olson (2007) を参照。

²⁸ Parfit (1984)。

²⁹ McMahan (2002)。

³⁰ Olson (2007) を参照。DeGraziaは動物説に立ちつつ人工妊娠中絶の許容可能性を主張する代表的論者である。DeGrazia (2005)、また (2007)。

³¹ DeGrazia (2007)。

³² 関連するものとしてSolberg, Gamlund eds. (forthcoming)。

³³ Gamlund (2016)。

³⁴ Dempsey (1947)。

³⁵ Solberg (2016), p.48。

³⁶ <http://www.healthdata.org/gbd/>。

³⁷ 広瀬・ボグナー (2017)、86頁。

³⁸ 害 (harm) の、とくに反事実的な概念に関する形而上学的な問題があり議論がある。Thomson (2011), Hanser (2008) など。

³⁹ 厚生労働省HP。 <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002n2npk-att/2r9852000002n2x4.pdf>。

⁴⁰ Solberg (2018)。

⁴¹ Solberg, Gamlund eds. (forthcoming)。

⁴² 「心理的統一性にもとづく年齢割引を施す」というだけの意味であれば、時点相対的

利益説は反事実的条件法にもとづく標準的な剥奪説とは異なる「剥奪」説に適用可能である。VIで紹介したヘルスケア分野における剥奪説の理解はこちらに該当するだろう。そこでは以下でのべる重大な相違は無視されている。

⁴³ McMahan (2002) が「継承戦略」「終点問題」として論じている死の因果的過剰決定ケースと死トークン評価の適切性の問題はここに関連があるが、本稿では論じる余裕がない。

⁴⁴ もちろん、剥奪量つまり遺失包括的価値量の大小に応じてそれぞれの死トークンの悪さの比較順序は推移性を充たす形で得られる。だが、この死トークンのより悪さという順序は、死トークンが起きる年齢の順序と必ずしも順序同型にはならない。

⁴⁵ Silverstein (1980)。

⁴⁶ Nagel (1987)、邦訳127頁。

⁴⁷ 死の「より悪さ」と生の「よりよさ」は同じ事柄だと考えることはできる。だが、以下VIII節で見ると、それは固有に「死の悪」の評価であるものを手放すことである。

⁴⁸ 最良の結果についてはそれを実現すべき理由があるとするなら、このような最良の死を実現することは道徳的義務となるはずである。これは、終末期医療で考慮される意味での安楽死よりも広範な「良き死」を実現すべき義務があることを含意するようになる。

⁴⁹ McMahan (2002)。

⁵⁰ Feldman (2006)。

⁵¹ 時点相対的利益説の場合、終末期の人物とそれ以前の主体との心理的連結性が、認知状態の低下などで減少すれば、終末期に残された人生はもはやそれ以前の主体に帰属しないと考えることができる。そうであれば、生の質の著しい低下にいたる前に、当の主体の剥奪される厚生量は尽きているかもしれない。最良の死は生物学的な死よりも相当に早いものであるはずだ。だが、生物学的には生存している当の主体がそもそもまだ存在しているのかと疑うことはできるかもしれない。存在しないのであれば、それはもう死んでいる。心理的統一性・連結性の消滅が死を意味する。これは、我々の形而上学的本性についての問題と再び絡むことになる。

⁵² 比較関係が反射的であればよいと言われるかもしれない。つまり当の死トークンが代替的死トークンそのものである場合である。だが、これは反事実的考慮を核心とする剥奪説とはかけ離れた考え方であるというほかない。

⁵³ この生と生の比較の可能性については多くの問題がある。だが、本稿では単純にそれを仮定しておく。まとまった議論としてBroome (2004) を参照。なお、このような生の比較がそれぞれの生の終焉である死トークンの起きる時点の時間順序に順序同型となる保証はない。「他の条件が等しければ」より長い生はより短い生より総厚生量がより大きいかもしれないが、他の条件が等しくないのが人生の常だからである。生の厚生量が生存時間の増加関数であるとする標準的人生の仮定のようなものが仮定されなければならないだろう。

⁵⁴ 本稿は2015年度白鷗大学研修制度による研究成果の一部である。公表がかくも著しく遅滞したことについて関係各位にお詫び申し上げる。